

特集 大震災を乗り越える

渡辺玲子さんが 推奨する詩「足跡」

夢を見た、クリスマスの夜。浜辺を歩いていて、主と並んで。砂の上に二人の足が、二人の足跡を残していった。私のそれと、主のそれと。

立ち止まって後ろを振り返った。足跡はずっと遠く見えなくなるところまで続いている。

ところが、一つのこと気づいた。ところどころ、二人の足跡でなく、一人の足跡しかないのに。

私の生涯が走馬灯のように思い出された。

なんという驚き、一人の足跡しかないところは、生涯でいちばん暗かった日とびったり合う。

そこで、主のほうに向き直って、あえて文句を言った。

「どうして、人生の危機にあった私を一人で放っておかれたのか、まさにあなたの存在が必要だった時に」

ところが、主は私に答えて言われた。

「友よ、砂の上に一人の足跡しか見えない日、それは私がきみをおぶって歩いた日なのだよ」(一部省略)

渡辺玲子

才能教育研究会理事
ウアイオリニスト

メソッド会員の中に、被災されて今このときにも大変な思いをされている方がいらっしやると思うと、心が苦しくなります。しかし、「これまで何度も繰り返されたような言葉をもた並べるようなことはしたくない」という思いから、なかなかメッセージを書けずにおりました。

数日前偶然に「足跡」という詩に出会い、心に暖かい光をもたらしてくれました。この詩は作者に諸説あり、人生の進路に悩んでいたマーガレット・F・パワーズという若いカナダ人女性が1964年に書いたとも言われ、それよりも古く19世紀のイギリスの牧師の説教で取り上げられたという説もあり、本当のところはよくわかりません。ヨーロッパでは近年ポピュラーソングにもなりヒットしたそう

で、インターネットなどでも広く取り上げられていますし、曾野綾子さんの著作「老いの才覚」(ベスト新書)にも引用されているので、ご存知の方もいらっしゃるでしょう。

最後の段を読み終わり、溜まっていた心の力みがふっと取り去られたような気がしました。人生の一番苦しい時に、実はどれだけの愛が詰まっているか、そのときには感じることができなくてもいつかきつと理解できるときが来る。そのように意識して生きていたら、どんなに勇気が出るでしょう。